

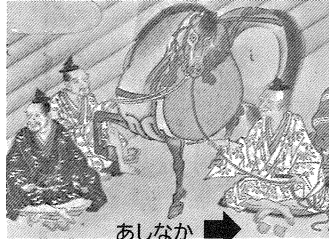
わらじ

みの



わらじ

みの



あしなが



昔の人は農作業がない冬の間に、「わら」を使って生活に必要な道具を作りました。

たとえば、足を守る「はきもの」は、ぬげないようにひもをつけた「わらじ」、指をはみ出させてすべり止め(スパイク)の役目をさせる「足半」という小さなぞうりなど色々な種類がありました。

「みの」は「わら」で作るマントで、はおると雨や寒さ、日差しをふせげます。また、荷物を背負うときに背中が痛くないように当てたりもします。

他にも床にいたり、縄や入れ物をつくったりと色々なものに「わら」が使われていました。

🔍 現在わたしたちの生活に同じようなものはあるかな？

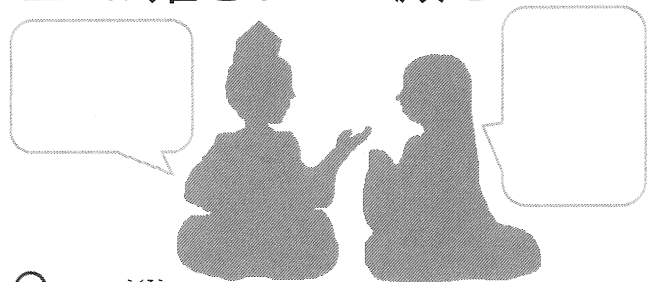
お風呂

昔は体が汚れたときは川で洗ったり、お湯でぬらした布で拭いてきれいにしました。

お風呂もありましたが、お湯につかるのではなく、蒸し風呂(サウナ)の湯気で「あか」を浮かせて拭き取ったりしました。



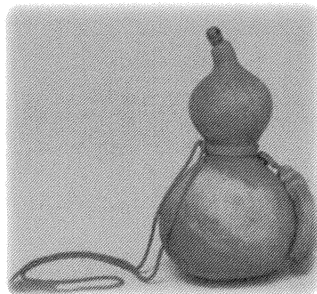
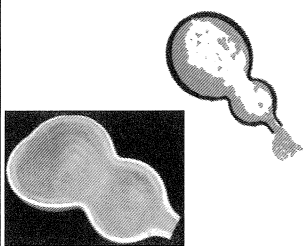
お姫さまとお殿さま



🔍 どんな服装をしているのかな？

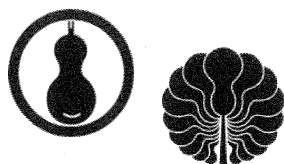
🔍 2人でどんなお話をしているのかな？

ひょうたん



ひょうたんは美の部分腐らせて中身をかき出し、乾燥させると入れ物として使えます。お水やお酒を入れ腰に下げて使うこともできますし、割ればお皿や「ひしゃく」の代わりになります。

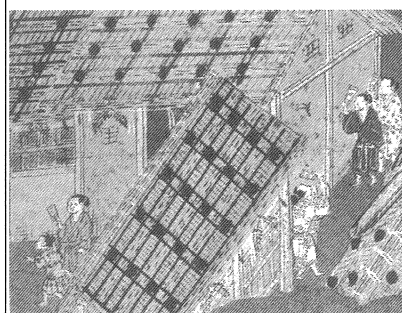
また、ひょうたんは魔除けや開運に効果があるとされ家紋にも使われていました。



🔍 現在わたしたちの生活に同じようなものはあるかな？

羽子板

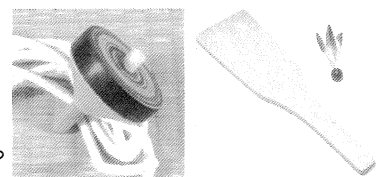
こま



中世の様子をえがいた絵の中には、板で羽根を順番に打ち合う羽子板(はごいた/こぎいた)や、中国から伝わった「こま回し」を子どもたちが楽しんでいるようすが見られます。

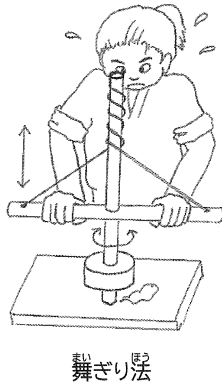
😊 羽根つきをしてみよう！

10回つづけられるかな？



ひ き
□ 火おこし器

持ち手を上下にうごかして軸を回転させることで木と木がこすれあい、熱を持ちます。(摩擦熱)
穴からこげた木の粉がこぼれ、その中に火種ができます。「つけ木」に火をうつしとすることで炎が大きくなります。



舞ざり法

- ❓ 中世の暮らしではどんな時に火を必要とするのだろうか？
- 😊 やけどに気を付けて回転軸の先を触ってみよう

とうだい しょうだい
□ 灯台(燭台)

小皿に植物や魚の油を入れて、そこに灯芯を入れてあかりを灯した照明器具の土台です。燃料の油は高価なので必要な所に必要なときだけしかつけませんでした。ですから夜の家中はとても暗いものでした。

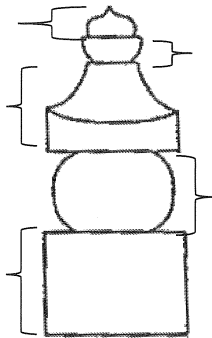


結び灯台

他にはたばねた木を燃やす「松明」や「ろうそく」が使われました。ミツバチの巣から採れる蠟を使った「ろうそく」は明るく長く燃え続けますが、高級品なので特別な行事や儀式の時にだけ使われました。

ごりんとう
□ 五輪塔

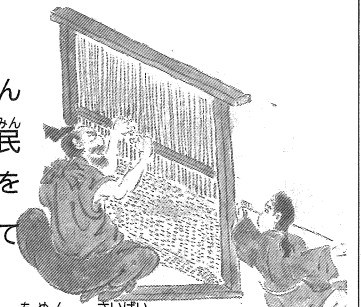
インドから中国を経て6世紀に日本に伝わった仏教は人々の間に広がりました。その思想に基づいて作られた小さな塔で、お墓として建てられました。この石を積み重ねた塔は宇宙を表しているといわれています。



- ❓ 丸や四角のそれぞれの形は何を表しているのかな？

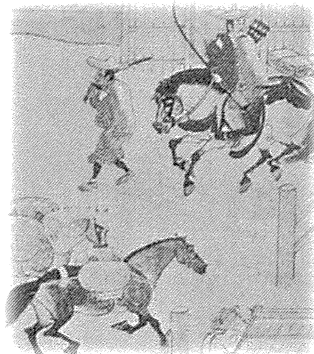
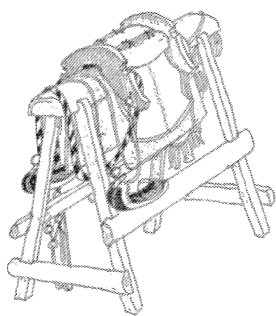
むしろ
□ 筵

「わら」などの植物を編んでつくった敷物です。庶民はこの「むしろ」や「わら」を寝床にして、着物をかけて眠りました。



室町時代の終わりごろに木綿の栽培が広がりますが、日常品に使われるのはまだまだ先のことで、貴族であっても「畳」の上で寝ていました。枕も木でできていたりふわふわとした現在の寝具とはずいぶん違いますね。

ばぐ
□ 馬具



馬が日本にやってきたのは古墳時代のころでした。体高(地面から背中までの高さ)120cmほどの小柄な品種で、走るのはそれほど速くありませんが、力が強く、荷物運びや農作業に大活躍しました。

また、よい馬を持つのは武士のほこりでした。武士は乗馬の腕を磨き、馬上から弓を射る訓練をしました。

乗馬するときは馬の背中に鞍をのせます。足をのせる「鐙」は西洋のものと違い、足全体をのせます。

ゆみ やり
□ 弓と槍

簡単につくる事ができ、強力な飛道具だった「弓矢」は鎌倉時代から南北朝時代にかけて戦の主役でした。

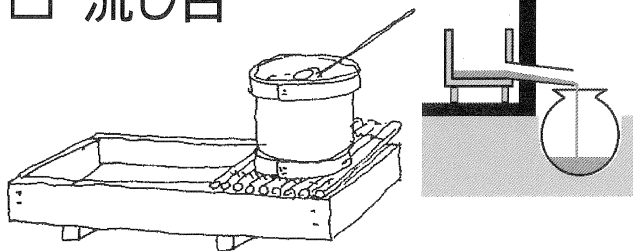


戦国時代になると「槍」が主流になります。

槍を使って鎧のすき間から相手の体突きついたり、相手を叩き落としました。また馬を突くことによって敵の部隊を混乱させたりもしました。



なが だい
□ 流し台

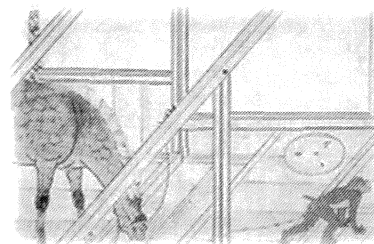


水を家の外に排水するシステムです。
甕にたまった水は植物にやったりして再利用します

さる
□ 猿(置物)

< 厩神信仰 >

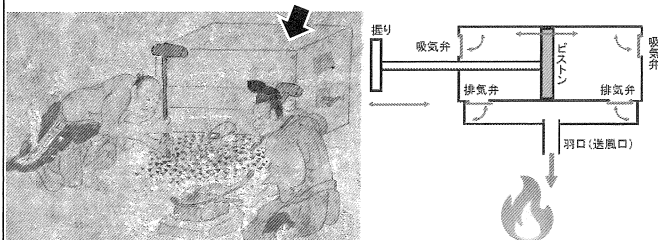
かつて日本では馬の
守り神は猿だったと言
われていました。



そこで重要な労働力として大切に扱われてきた馬の小屋
(厩)の中に猿を飼ったり、祠を設けて中に猿の頭蓋骨や猿を
描いた絵馬、お札などを祀りました。

□ ふいご

「ふいご」は炉の火力を落とさない
ために風を送る道具です



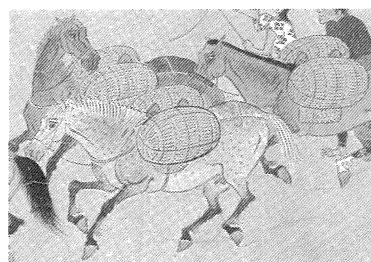
中世になって武士が台頭してくると、刀剣の生産が盛んにな
りました。(鉄の生産地に近い備前・備中は有名ですね)

室町時代には鉄の生産量が増え、鋤など農具の一部に鉄を
用いることができるようになります。

金属を扱う職人には、刀を打つ「刀鍛冶」、農具をつくる
「野鍛冶」、金属を溶かして型に流し込み、武器・鐘・農具・鍋な
どをつくる「金屋/鋳物師」などがいます。

鍛冶とは鉄などの金属を打ち鍛えて加工し、さまざまな器物
を作ることです。

こめだわら
□ 米俵



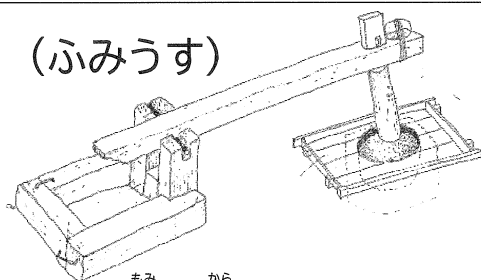
米は贅沢なものでしたが、室町時代のころから徐々に庶民
にも広がります。農具や肥料の発達、品種改良が進み、生産
量が増えてきたのです。

このころ米の調理方法が、蒸すから炊くへと変化します。

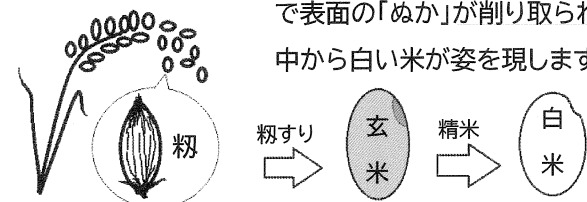
また、米は食料としてだけでなく、お金と同じような役目
をしていました。農民は年貢(田に対する税)として米を領主
に納めていたのです。

米の単位である1俵は約60kg、1石=2.5俵です。

からうす
□ 唐臼 (ふみうす)



白いごはんを食べるには粃から殻や「ぬか」を取り除く
必要があります。臼で何度も玄米をつく(精米すること
で表面の「ぬか」が削り取られて
中から白い米が姿を現します。



唐臼で〇〇をついてみよう(職員立ち合いのもと体験可)

てんびんぼう
□ 天秤棒



荷物を手に掲げると、背骨だけで
なく、腕や握力にも頼らないとい
けません。しかし、天秤棒を使えば
体の中心に力がかかるようになり
運搬が楽になります。

人間の背骨は垂直方向にかかる
力に対しては強いので、しっかり背
を伸ばせば背骨で支えた方が楽になるからです。

また、棒が上下へ「しなる」ように設計しているの
で、上にふわりと荷物が浮いたときに前に進めば楽に運べます。
このように道具を使うことで長時間の運搬も可能になりました。

天秤棒で荷物をかついでみよう(職員立ち合いのもと体験可)